— 第6回 —

医療法人ナカノ会 理事長
◆
ナカノ在宅医療クリニック 院長
◆
鹿児島大学医学部 臨床教授
◆
一般社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会
IT・コミュニケーション局長

中野 一司
Kazushi Nakano

【在宅医療と医療改革】

ラップ療法にみるケアの哲学

1 ラップ療法とは?

ラップ療法は、鳥谷部俊一医師により開発された、簡便、低コストの優れた褥創の治療法である（文献1・2）。ラップで褥瘡をやさしく包み、褥瘡の自然治癒力を支援するのが、ラップ療法のコンセプトである。褥瘡は、（水道）水で洗い、ラップなどで、傷を乾かさないように工夫（ケア）すれば、自然に治癒する。

■なぜ、ラップ療法で褥瘡が治るのか?

人体には自然治癒力がある。傷（褥瘡も傷の一つ）ができれば、60兆個の細胞から構成される我々の生体内組織（生体社会）は、創傷部位（戦場）に、白血球やマクロファージ、血小板、血管内皮細胞、平滑筋細胞などのミクロの戦士を総動員する。「いざ、鎌倉!!!」の世界である。そして、戦場（褥瘡部、炎症部）に動員されたこれらのミクロの戦士達は、細菌を殺す抗体やサイトカイン、戦いのあとの廃棄物を片付けるための蛋白分解酵素、復興修復のための血液凝固因子、細胞増殖因子などを生産、分泌し、自然に傷（褥瘡）を治すように、各細胞間で連携しながら機能する。

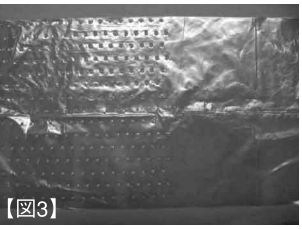
図1のような褥瘡部位には、これらのミクロの戦士（免疫細胞や修復細胞）が集合している。病院で伝統的に行なう褥瘡への消毒やガーゼ処置は、これらミクロの戦士を殺し、これらの自然治癒行為を全て台無しにする。図2は、これらの褥瘡に消毒、ガーゼ処置をして、褥瘡表面の細胞が壊死した写真である（入院先の病院でこのような褥瘡を作ってきて、在宅医療が始まった）。ラップ療法はこれらのミクロの戦士の行動に湿潤環境という心地よい環境を提供し支援する行為、すなわち（キュアではない）”ケア“そのものの行為である。

■ラップ療法の基本的な考え方

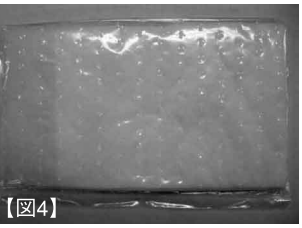
ラップ療法の基本的な考え方は、次の2点である。（1）褥瘡は、乾かさないようにする（浸出液は、褥瘡表面にラップなどの基材で、閉じ込める。褥瘡を乾かせば、その内部に含まれる、褥瘡表面のミクロの戦士達（免疫細胞や修復細胞など）が死んでしまい、褥瘡は治りにくくなる）。（2）浸出液は、できるだけ、排出しやすくする（褥瘡から排出された浸出液＝褥瘡周囲の血管から排出される水分は、褥瘡表面のミクロの戦士（細胞）を生かす大切な水分である一方、褥瘡から排出される汚水であって、浸出液を完全にラップで閉じ込めておけば、浸出液が細菌の培養液となり、必ず感染を引き起こす）。

このように、褥瘡から排出される浸出液をどう扱い、褥瘡の修復（自然治癒力）をどのように引き出す（支援する）か?が、ラップ療法のキモなのである。そのために、（1）浸出液を閉じ込め、湿潤環境を維持する、（2）浸出液を排出する、という2つの相反する作業をどのように工夫、実践するかが大切なのである。

【図1】


【図3】

【図2】


【図4】

褥瘡にこのような環境を提供するために、最近では、穴あきポリエチレン袋（台所の生ごみの水を切るための穴のあいたビニール袋）（図3）の中に紙オムツをつめた"穴あきポリエチレン袋ー紙オムツ"（図4）をあてるだけで、以上の1、2の条件を同時にできる画期的な方法（穴あきポリエチレン袋―紙オムツ療法）を多用している。この方法だと、褥瘡の大きさ、深さに関わらず、ズレも気にしなくて、あらゆる褥瘡に適応できる。

褥瘡を洗う水は、滅菌精製水や生理食塩水である必要はなく、水道水で十分である。なぜなら、褥瘡の浸出液は、周囲の血管を通して、生体内部から湧き出て（排出されて）きて、細菌も一緒に排液してくれるからである（排液＝ドレナージおよび洗浄が重要）。同様の理由で、穴あきポリエチレン袋―紙オムツも、無菌である必要はない。

4 病院医療の鬼っ子―ラップ療法

このように手技も簡便で、コストも安く、在宅医療の現場では非常に重宝されているラップ療法であるが、病院医療ではまだまだ普及していないという側面もある。

昨年（2009年）9月、第11回日本褥瘡学会のシンポジウムに呼ばれ、「在宅医療とラップ療法」というテーマで15分講演した。日本褥瘡学会は、病院医療の学会であるが、褥瘡をどのような水（滅菌精製水、酸性水など）で洗い、どの被覆基材を使ったら褥瘡は早く治るか？などを研究する学会である。

本学会の多くの会員は、エビデンスのないラップ療法なんて使いたくない、というのである。シンポジウムで筆者が「褥瘡は治す（キュア）」のではなく、褥瘡は治る（ケア）のである」と強調しても、病医医療の世界では理解してもらえなかった。ある意味、病院医療の世界は思考停止を起こしているともいえる。病院医療において、スタッフの80％がラップ療法を支持しても、20％の抵抗勢力がいれば、ラップ療法は実践されない。

ベストセラーの1Q84の作者である村上春樹氏は、「システム（権威）は個人の思考停止を起こす」といっているが、まさに病院医療は病院スタッフの思考停止を起こしていると、昨年、日本褥瘡学会に参加して感じた。

ラップ療法は、日本褥瘡学会の鬼っ子であったが、つい先日の2010年3月3日に、日本褥瘡学会がラップ療法を容認するコメントを出した（http://www.jspu.org/pdf/20100303.pdf）。ICT時代を象徴する医学史上の歴史的な出来事だったのではないかと、筆者は秘かに考えている（ラップ療法はインターネットを通じて、全国に普及した）。

5 在宅医療に相性のよいラップ療法

褥瘡をできるだけ早く治したいというのが目的なら、壊死部をしっかり除去するなり、洗浄水、被覆基材にこだわる必要があるだろう。在宅では、必ずしも褥瘡が早く治る必要はなく（褥瘡と在宅での療養生活が共存できれば良い）、むしろ、誰でも実施できて、簡便で、コストが安い方法が望まれる。そういう観点から、ラップ療法は在宅医療と非常に相性のよい褥瘡ケアといえる。

ラップ療法では、褥瘡は、水道水でよく洗い、穴あきポリエチレン袋―紙オムツをあてて、これをまめに（毎日）交換することで、褥瘡は自然に治ってしまう。しかも、イソジン消毒、生食洗浄、滅菌ガーゼを当てるなどの、旧来の病院医療の方法に比べ、治療成績は断然良く、コストは格段に安い。更に、この穴あきポリエチレン袋―紙オムツ療法は、褥瘡の治療（キュア）を、褥瘡のケアのレベルに変えてしまい、従来の医療行為を介護職で対応可能の介護のレベルに転換させ、訪問看護師の専業作業だった仕事を介護職の仕事のレベルにまで変えてしまった。

6 ラップ療法は在宅医療だという哲学（コンセプト）（2）

ラップ療法では、ラップ（穴あきポリエチレン袋―紙オムツ）などの基材で褥瘡を治したわけではない。ラップ（穴あきポリエチレン袋-紙オムツ）などの基材で、褥瘡が自然治癒する環境を提供し、褥瘡の自然治癒を支援しただけに過ぎない。

一方、病院医療が"病気を治す医療"（キュア主体の医療）であるのに対し、在宅医療は、"生活を支える医療"（ケア主体の医療）である。在宅では、自宅に帰ってこられただけで、精神的にも安定し、自然治癒力を引き出し、患者が元気になられる場面に度々遭遇する（良い精神症状が免疫系に働き病気を治すことは、科学的にも立証されている）。在宅そのものがラップと同じ役割で、患者（褥瘡）が良くなる環境を提供して、患者（褥瘡）は自然に良くなるのである。

「あなたの褥瘡が治るのを温かく見守り、支援します」、というラップ療法のコンセプトは、「あなたの生活を医療、介護、環境面から支援します」という在宅医療のコンセプト、すなわち"ケア"そのものである。

【文献】

（1）鳥谷部俊一：食品包装用ラップを褥瘡治療のドレッシング材として用いる。日本褥瘡学会誌、1：180、1999

（2）鳥谷部俊一：「褥創治療の常識非常識」：三輪書店。2005